Osaka University Knowledge Archive

Title	弥生文化形成過程の研究
Author(s)	中村, 大介
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47092
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【19】

氏　　名	中　村　大　介（なかむら　だいすけ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２０７９０　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**弥生文化形成過程の研究**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　福永　伸哉 （副査） 教　授　小林　　茂　　助教授　高橋　照彦

論 文 内 容 の 要 旨

日本列島において少なくとも数万年にわたって続いてきた獲得経済から、水稲農耕に基礎を置く生産経済へ移行する時期は、日本史上の大きな転換点であり、多くの研究者の問題関心を呼んできた。本論文は、この縄文時代から弥生時代への移行期に焦点をあて、中国や朝鮮半島の同時代の文化を広く見渡しながら、日本列島で展開した文化変化の過程やその背景を東アジア規模で論じたものである。全体は６章からなる本文と図表で構成され、分量はＡ４判 631 頁、本文 400 字詰原稿用紙換算約 1200 枚、図表 366 枚に及ぶ。

弥生文化の特質や形成過程に関する研究史をふまえて本論文の研究目的を明確に示した第１章に続いて、第２章では研究の前提として弥生文化を含む東アジア諸文化の編年的併行関係と暦年代を整理する。AMS 炭素 14 年代法によって弥生時代開始年代を従来案より約 500 年遡らせた前 10 世紀とする最新の学説に対して、大陸の遼寧式銅剣や磨製石鏃の型式学的分析を通して前８世紀と考える独自の年代観を提唱し、これに基づいて中国東北地方から日本列島にいたる諸文化の編年的大枠を提示した。

第３章では、朝鮮無文土器文化、さらにはその淵源である中国東北地方の農耕文化における集落構造、葬制、土器製作法などについて、現地での精力的な資料調査をふまえた分析を行い、弥生文化形成期における外来的な影響を検討するための基礎作業とした。

第４章では、縄文文化の特徴を集落構造、葬制、土偶祭祀、土器製作法などの諸要素にわたって検討する。その結果、縄文時代には気候や環境に恵まれて集住と社会の階層化が進む局面と、安定的な集住が続かず集団の流動化が著しくなる局面が、時期や地域によって複雑に現れたことを指摘するとともに、水稲農耕受容期の西日本は気候の寒冷化などの影響を受けて後者の局面にあったという見解を示した。

これらの分析を基礎として第５章では、弥生文化形成過程について、影響を与える側の大陸文化の地域性、受容する側の縄文文化の地域性、大陸文化の波状的影響といった視点を重視しながら考察する。具体的には、朝鮮無文土器の影響による土器様式や土器製作法の変化、環濠集落の出現、木棺墓・方形周溝墓などの新たな埋葬施設や副葬習俗の登場に見られる葬制の変革などが、地域差、時期差を含みながら西日本でどのように展開していくかという点を、詳細に論じている。

以上の考察を総合して、終章となる第６章では、前８世紀頃の小寒冷化を引き金として朝鮮無文土器文化の水稲農耕や葬制を受容することにより北部九州で経済面・思想面の変革が生じた第一段階（弥生早期）、そうした変化が西

日本に広く波及するとともに無文土器文化からのさらなる波状的影響を受けて縄文文化からの脱却を遂げた第二段階（弥生前期末）をへて、弥生文化が形成されていくという大きな道筋を提示した。そして、東アジア規模でとらえると、弥生文化の形成は中国東北地方の諸文化に由来する文化要素が朝鮮無文土器文化を経由して列島の縄文社会の中に受容される過程であったと意義づけた。

論文審査の結果の要旨

かつて縄文時代から弥生時代への移行については、大陸からの渡来人が水稲農耕を伝えたことによって不安定な獲得経済から安定的な生産経済へ「進化」したと理解されることが一般的であった。ところが、1990 年代以降、好適な環境の中で長期にわたって継続発展する縄文大集落の存在が明らかになり、また、プラントオパール分析によって遅くとも縄文後期にはイネ栽培が確実視されるようになると、弥生文化は在来の縄文人が長期間かけて大陸文化を主体的に取捨選択した「変容」にすぎないとみる主張が勢いを増してきた。そうした本質的な議論がぶつかり合うテーマに挑んだ本論文は、渡来か在来かという単純化されがちな議論を排し、文化要素の外来的な影響とそれを受け入れる縄文社会の地域的、時期的な偏差をふまえたうえで、弥生文化形成過程を東アジア農耕文化の波及として新たに位置づけ直した点で独自の主張を明確にしており、研究の到達点を大きく前進させたものとして高く評価できる。

とくに、中国東北地方から朝鮮半島の同時期の諸文化や先行する縄文文化の全体像を視野に入れて弥生文化形成の意義を論じた点は、このテーマに関する従来の研究にはなかったスケールの大きさを感じさせる。また、朝鮮無文土器文化に内在する地域性が弥生文化形成の地域差にもかかわることや、無文土器文化からの影響の波を二段階に分けてとらえ、弥生文化形成に及ぼした意義がそれぞれ異なることを指摘した点などは独創的な成果であり、今後多くの議論や研究を喚起するであろう。

もっとも、本論文にも改善すべき点がないわけではない。集落構造、葬送習俗、土器製作法、武器型式をはじめ多岐にわたる資料分析を盛り込んだ割には、その成果が結論の導出に十分に生かされていないものもあり、テーマを定めた論考としてはいささかまとまりを欠いている。また、死生観などの観念領域に及ぶ文化的な影響関係を実証する方法が主観に偏りがちになることや、他の学問分野の用語を用いる際の理解が不正確であることなど、論述の信頼性にやや懸念を抱かせる部分も散見される。

とはいえ、地域的、時期的にも大きな広がりをもつ膨大な資料群を丹念に収集分析し、明確な課題認識のもとに、弥生文化の形成過程とその意義についてオリジナリティ豊かな主張を展開した本論文は、十分な学術的意義を有していると評価できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。